
僕の彼女は男。

ゆずり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の彼女は男。

【Nコード】

N8328C

【作者名】

ゆずり

【あらすじ】

男と女の恋愛の固定概念など気にはしない様々な青年、少年達。彼等と世間の常識が違う事は「彼女Ⅱ男」ということ。それは周りからどんな目で見られるかはわかりもしません。しかし、難しい考えなど彼等の中にはありません、ただ好きになった彼を愛す事で精一杯なのですから。時には傷つき、時には涙を流し、時には愛しの人からの拳を受け、時には思いもよらぬ目惚れをしたりと、様々な恋をする彼等。この先の道を全速力で駆け抜ける多くの多難を抱えた彼等の後姿、どうぞ見守ってやってくださいね。

プロローグ

大まかに世界を分ければ「男」と「女」の二つで成り立っているわけだ。

「男」と「女」が恋をし、夫婦になり、命を育みその先を繋ぎ合せてまた繰り返す。

その真実を誰かが正そうとも思いやしない。

それが事の成り立ちで普通ということなのだけれども

どうも自分はそれが疎いようで。

大体、「男」は「女」と付き合いなさいと誰が決めた？

そう、気がついたか？誰も決めてや、いやしない。

誰かが理屈を並べてその理由を話したところで頭にすっかり、とはこない。

確かに事の「成り立ち」としては「男」「女」であるけれどもそれを押し付けられる理由はない。

しつこいがもう一度いう、自分は「男」と「女」が付き合いうと言った固定概念を否定する訳ではないが正直疎い。

事実、自分の彼女は「男」だ。

世間ではこれを「ホモ」やら何やらいうらしい。

そういう事にも疎い自分としては何を言われようが気にはしないがただ「ホモ」と言うよりも「ゲイ」と言ってくれる方が心地がいい。

その理由を問われれば二つ答えがある。

「ゲイ」は自分達を否定する為にある言葉ではないと理由。

そしてもう一つは自分の彼女は何時も自分達を表す時笑顔で言うからだ。

「私達はゲイ。それが何だっていうのよ、素敵じゃない？」

なんてね。

一人目・素敵な初恋。

もしも恋をした相手が男だったら、他の奴だったらどうしてたのか。そんなの解りやしない。考えなんて人のいる限りその分あるのだから。

その多くの考えの中での俺の答えが「そのまま恋をする」という結果という話。

好きなんだから仕方ないだろうが。文句は受け付けない。

正直な話、小さな頃から恋愛に関しては疎い方だった。

幼稚園の頃、雛祭りのイベントやらで好きな子連れて来て一緒に写真を撮るという物で

一人の女の子が自分の前に来て「一緒に来て？」という声にもこう答えた記憶がある。

「ごめんね、僕今なちゃんと遊ぶ約束してるから。他の子を誘ってよ。」

あの後、自分を誘いに来た女の子は泣きながら自分の前からいなくなった。

その後母にこつぴどく怒られた覚えもある、幼い自分には意味が解らなかったが今なら解る。

幼い頃の自分に言ってやりたい、そこはもっと気を使って断るべきだと。

小学生高学年の頃、一人のクラスメイトに告白されたときもそうだ

った。

やさしい可愛い女の子だった記憶がある。

顔を赤くしながら自分の様子を伺い告白する目の前のクラスメイト。そんな子へも答えた言葉は確かこんな風だった。

「ごめん、今から田中達と遊ぶんだけどさ…話は終わり?」

その後クラス中の女子たちから最低という非難を浴び続けたのは言うまでもない。

卒業するまで「最低野中」として女子の間で呼ばれていたのを知っている。

中学生になりその様な可愛らしい告白も何もない男子校へと進み恋愛という物とは程遠い存在になった。

元より普通の自分には、普通にいずれ恋愛し普通に生活をしていく物だろうと

半場人生のあきらめもついて、老後計画を立てようとしていた話な訳で。

そんな詰まらない日々突然彼女はきたわけで。

「むさくるしい男子校に美人な男子生徒が来る。」

そんな噂がたったのは高校に上がってから季節がめぐり高校生活初秋の事。

文化祭用意も始まり、情報がより多く行きかう時期に訪れた大きな

事件になった。

元々体育会系が多い学校だったせいか、どこの男子校よりも男臭くどこの男子校よりも寂れていたのは事実。

美形なら男子でも何でもいい、そんな考えが大抵の男子についていた気がする。

大体、見目麗しい男子生徒はすぐに先輩に引き抜かれお気に入りされてたせいか

同学年であろうと手出しはできやしなかった。

何に期待する必要がある。

今回もどうせ先輩たちに引き抜かれ、ちやほやされるのを見ているだけだろうが。

元々そんな考えをもっていた俺は何も言わずにその噂の転入生を待つだけ。

他の男子生徒の異様な盛り上がりなど気には留めていなかった。

だが厄介なことになるのは得意らしい。

よりによってその転入生は俺のクラスへ御出でになるらしい。

どこぞの展性的な小説だよ、そんな文句を隣の席に座る親友の田島に話している中

担任が入ってくる、そのときはホームルームが始まっていたのにも気がついてなかったし

田島との話に熱中していた。それがいけなかったんだ、話を戻せば。

田島との話の熱中している中で不意に聞こえてくる涼しげな声。

凜とした少し高めのトーンでの独特なしゃべり方、不可思議な名前。

むさくるしい空間に似合わないその雰囲気振り向いてしまった。

「本城牡丹つていいいます。私、男子校というところが初めてなので優しく教えてくれると助かるの。どうかよろしくね？」

長く伸ばされた癖のある金の髪

異様に整った顔立ち

白い肌に女口調

完璧な笑顔

髪色と顔だちに似合わない学ラン姿

クラス中が唖然と新たなクラスの仲間となる相手の、口調に驚く中で俺は人生初めての一世一代ともいえる恋に落ちた。

そうか…あれがいけなかったか
どうも一目惚れは質が悪いらしい。まったく。

一人目・素敵な初恋。（後書き）

初恋って自然と終わってませんか？
私の初恋は犬でした。

二人目・きつかけなんて簡単。

牡丹が転校してきてから学校内は大きな騒ぎとなった。

美人な転校生はオカマなどという噂が広がったのは言うまでもない。あんなに期待していたのと言う文句が聞こえる反面

予想以上の美人が来たという噂が流れたのも確かな事。

学校内の男子たちはただ勝手に話を進めていたが、当の牡丹自身は何食わぬ顔で

俺の前の席に座っていた。

その姿は非現実的で浮いていて、黒い学ランの真新しさに静かに笑みを浮かべつつ受け答えする様子が不思議だった。

「なあ、前の学校ではなんて呼ばれたの？」

「本城か、牡丹のどちらかよ。」

「前の学校ではもててただろう。」

「そんな事ないわ、私を好いてくれる人なんて居る訳ないもの。」

「なら俺彼氏候補になるっ」

目の前で繰り広げられていくクラスメイトとの親しげな会話。

難もなく癖もなく受け答えをしていく。

それは新しい所でやっていくいき方に慣れているようで不思議と俺の中でひっかかるものがあったのは確かなことで。

俺へと挨拶をしてきた時しか牡丹と話していない自分には笑える考え。

恋とはここまで妄想を発展させる物なのか未恐ろしい。

俺自身としては転校生が目の前にいて、その転校生はただきれいで。

恋にも似た感情を抱いてしまつて。

それだけの話かと思っていた。

それだけなら俺としては楽だつたんだ。

苦もへつたくれもなくそもなく過ごせたんだから。

それで十分だと言つのに既に牡丹が転校してきた日から俺は変わつたらしい。

そう人生の機転というものは若い年では現われやしないだろう。どこことなくそんな楽な考えいつていた。

大きな機転はきっと年取つてからと思つていたというのに。

突然そういうものはくるらしい。

全ては俺の隣に座る親友の田島の手紙がきっかけだった。

忘れやしない本当のすべての始まりの日の事を。

秋晴れの青い空が窓から見える、牡丹の金の髪が視界にかすかに写る中

田島から回ってきた手紙に書かれていた言葉。

恋に似た感情を抱いていた俺には十分な言葉だつたんだとおもつ。

「知ってた？牡丹って前の学校で苛められて此处に来たんだよ。」

同情といわれれば別にそれでもいい。

それでも視界にうつる金の髪を捉えてはただ思った。

真新しい学生服に身を包み、自分を包み隠さずきた相手の覚悟はどのくらいの物だったのだろうか。

計り知れない孤独と苦痛を抱えてきた

牡丹の小さな背中を見つめながらあの日俺は思った。

「その先が知りたい」

ここで俺と牡丹の出会い話は終わり。
俺を変えたことの話も終わり。

物足りないと感じたなら謝ろう。
だけどな俺達にはちんたらしてる時間はないんだ。

何故って？

それは俺のいいらしい彼女が早く今の俺たちのことを知ってほしいとせがむからだ。

俺と牡丹が付き合うきっかけの話はこの先の中でいずれ語るだろう。
それまで俺と牡丹を見守っててくださいよ。

ほら、よく言うだろ。
青春は短いんだってさ。

二人目・きっかけなんて簡単。（後書き）

きっかけなんて簡単なようです。

好きになるのも嫌うのもそれは不意なことばかり。

次回から二人のどたばたした

日常へと舞台はかわります。

ぼやきも増えるのでしょうかねー…

三人目・突然の訪問者

嵐は何時だつて突然くるらしい。

誰だ、嵐の前の静けさという言葉を作った奴は。どこに静けさというものがあつた、答えてみる。

嵐の前が静けさがあるならそれにただ縋り付きたかつた。くそ、こんな嵐望んでいない。

「嘘でしょ！！何よこれえっ！」

ほら、はじまつたっ。

「ちょっと！啓介これどういうことよっ！」

「いや…どうも、こうも、こう言う事ですけど。」

「ありえないじゃないっ！突然、私の家に猫がいるなんてっ！」

事の始まりは簡単なこと。

牡丹の家にいるはずもない猫が転がりこんでいたという話。

そんな中たまたま俺が遊びに来て、猫と遭遇してしまった牡丹にかまつたという事。

いや、いくらなんでも俺でも突然言われても。

そんな困惑を知ってか知らずか牡丹は俺に抱きつき泣き喚いている。

耳に入るのは「嫌」だの「怖い」だの。

たまには俺の話も聞いてくれ牡丹。

元々、牡丹は猫が苦手らしい。

帰宅途中に猫にあうと決まって嫌な顔をしていく。

嫌な顔をしては俺の後ろへと隠れて猫から身を隠していく。

その理由を聞けば幼い頃、まだ無垢で純粋な牡丹は猫を飼っていたらしい。

それはそれはかわいい子猫で、家の家族全員で可愛がり育てて。

名前は自分の名前からとり「ぼん」と呼んでいたらしい。

此処で名前の事をつつこんだら負けだからな。

ぼんを育て可愛がっていたある日。

牡丹がぼんをお風呂へと入れ一緒に楽しいバスタイムをしていた時悪夢が訪れたといっぺい。

ぼんがお風呂を嫌がり逃げだすのを牡丹が取り押さえ

抱きかかえようとした瞬間、ぼんが牡丹の大切な息子をかんだらしい。

そりゃ…嫌いになるよな。

「牡丹、本当にこの猫が入ってくる理由とか、原因とか入ってこれる原因ないの？」

「ないにきまつてるじゃないのよっ！」

牡丹が必死に俺の腕にしがみつき泣き喚いているのは言うまでもない。

困ったことに猫は牡丹の部屋が気に入ったのか、どっしりと腰を下ろし

部屋の主がベツトの上で縮みこみ喚いているのもお構いなしに部屋を見渡し物色していくようにしている。

根性の座っている猫だと言っている場合ではない。

可愛げのある猫なら牡丹も猫へとこんなに拒絶はしなかったんだろ
うに

困ったことにこの猫の顔はどう見ても、いかつい。

まるで一昔前の猫の親分のような顔をしてこちらをにらんでいる。
我が物顔だ、此処は俺のものとも言つように。

「牡丹、どうやらあの親分様は此処が気に入ったらしい。」

「ちよつとやめてよ！！此処はわたしの部屋だつてばっ！」

ピンクのシーツベツトの上で叫ばれてもどうしようもない。

泣き叫ぶ牡丹を横目に猫はこちらへと歩いてくる。

完全に背中へと隠れ怯える牡丹をそのままに猫を抱き上げようか。
意外な重量感、重いと感じながらもやはり可愛い。

どんなにかつい顔をしていようの猫は猫だ。

「よし、俺こいつ飼う。」

「…嘘でしょつ、私啓介の家に遊びに行けなくなるっ」

「いや、これる。自力でこい、俺を愛してるというなら。」

「愛してても無理よっ！絶対に無理って言ってるじゃない！」

「おーしいかちい猫、おいでな俺の家に。名前は牡丹にしよーな」

「いやあああああつ！！！！！」

可愛い俺の彼女が泣き叫ぶ中
可愛い俺の家族が一人増えた。

彼女の名前は「牡丹」

可愛い家族の名前は「牡丹」

泣き叫ぶ彼女の声に、紛れて聞こえる猫の鳴き声。

明日から俺の部屋にくる時の牡丹が楽しみだ。

三人目・突然の訪問者（後書き）

猫に大切なもの…痛そうですね…；
ちなみに私は無視が大の苦手っ子です。
友達といると倒せるんですけど…

四人目・怒涛の文化祭。

ご無沙汰しております、寒くなりましたが

牡丹はいつもの様に乙女パワーを発揮して生きています。

ええ、それはもう目を瞑りたいぐらいに。

今日だってほら、もう問題を起こしやがるんだっ

「ちょっと！啓介！」

俺を呼ぶのはもうやめてくれ…。

寒くなり秋の訪れが見えてきた今の時期は丁度

イベントの真っ盛りの時期に差し掛かる。

文化祭に、ハロウィン、そして高校生上学年は部の引退と

多くのイベントがあるが、言うなれば俺達にとって大きなイベントは

文化祭と言つべきか。

牡丹と俺は同じクラスと言う訳で、やる事も一緒。

今年のクラスの出し物は「女装喫茶」

最近色々とはやっているが、耳にするのは

大抵男装喫茶や執事喫茶やメイド喫茶が普通だというのに。

このクラスときたら「女装喫茶」だ。

俺を悩ませるのが相当好きなクラスだろう。

「ねえ啓介、この服どう？」

いいんじゃないのか？

「ピンクと黒、ブルー、オレンジどれがいいかしら？」

どの色でもいいさ。

「ちょっと聞いてる！？」

「あー…はい？」

牡丹は先程からドレスや、メイド服、スカートを持ちはしゃいでいる。

確かに牡丹を好きだから、牡丹といるのはいいが、いやほらね。

世の女性はお気づきだともいますけど、実際の筋肉がかなりついている

男子に着せてみてください、ほらっ妄想。

気持ち悪いだろ？

それを実際俺がやるとなれば憂鬱にもなる。

胃が痛い、学校の放課後が来るのが怖いのはこれのせいだ。

牡丹が怒りつつ俺にドレスをあてがい悩んでいく。

俺はどれでもいいよと呟いていれば、牡丹の愛の拳がくるわけで。

「…っ牡丹、お願いだからこれ以上俺に恥をかかせないでくれ」

「いいじゃない！世の腐女子はそれを望んでるのよっ！？」

「…誰だよ！その腐女子はっ！」

牡丹へと叫んでいれば牡丹は牡丹で窓の向こうを指している。

どこに人がいるんだよ、そういつてやりたくなる。
床や机に散乱したドレスをにらみ見つめては悲しくなる。

思わず抜け殻になりそうな自分を必死に食い止めるのに俺は精一杯で。

ああ、空がまぶしい。

「…そんなにいやなの、啓介。」

「嫌だ。」

「…なら解ったわっ、まってなさい!」

そっぴい残して去って行つた牡丹。

嫌な予感がするのは俺だけかと感じていた末に
持つてこられたものは女性雑誌。

「これでメイクやダイエットを学びなさいっ。」

そう来たか…

怒涛の文化祭時期に入りましたね世の乙女。

夢見る少女に甘い香り、そしていとしい彼女。

俺のポケットマネーにより増えていくメイクセット。

ああ、そうかこれがたくらみか。

かわいい彼女のためならなんでもするが

この文化祭での俺の羞恥心と、メイク代の損失は大きいらしい。

四人目・怒涛の文化祭。（後書き）

読んで下さり有難うございます

文化祭で女装喫茶を見かけました。

個人的には二次元キャラを服をきてモジモジしてる子が可愛くて
ニパニパしてましたね笑

ちなみに続きますよっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8328c/>

僕の彼女は男。

2010年12月10日23時54分発行